第７２回日本 PTA 全国研究大会川崎大会

参加報告

8 月 23 日～24 日の二日間、神奈川県川崎市で行われた上記の大会に参加させて頂きましたので、内容についてご報告させて頂きます。大会概要や講師陣の紹介は「PTA 川崎大会公式サイト」と検索していただければご覧いただけますので割愛させていただきます。

本報告書では大会に参加されていない保護者、教員の皆様に、大会で聞かせていただいた内容をお伝えできればと思います。

川崎大会のテーマは「ウェルビーイング（well-being)」ですが、まだ多くの人にとって馴染みのない言葉ですので、まずはその言葉の説明から大会は始まりました。講師の内田由紀子氏のお話ではウェルビーイングとは、「生きがいを感じられるような幸せ、快楽という瞬間的な幸せというより、広がりのある幸せ」「幸福感に近いかもしれない」ということでした。日本語で一言で定義することが難しく感覚的な概念なので「ウェルビーイング」という言葉のまま使われているようですが、公演中は近い概念として日本語で「幸福」という言葉も使われていた印象もあります。一言に「幸福」と言っても、何が幸福と感じるかは一人一人違っています。大人も子どももまずは自分自身の幸福を考える、そして自分の幸福を目指していいし、それは自己中心的であるということではないと話されていました。

千葉県流山市で行われた先生と生徒に対するアンケートで、担任の先生の幸福度が高かったクラスはそのクラスの子どもたちの幸福度も高くなっていたというデータがあるそうです。親や先生が忙しそうにしていたりイライラしていたら、子どもは困った時に気を使ってしまいます。子どもたちはゆとりを感じられる大人には「サポートしてもらえる」「助けてって言っていい」という安心感を感じられます。私たち大人が「幸せになる為に何かを我慢する」ということから脱却して、大人がゆるくなってもいい、日本はそういう時期に来たというようなことをどの講師の方も繰り返しお話されていました。

講師の親野智可等氏からは「子どものだらしなさを“今のうちになおしてあげよう”と思わなくても大丈夫」というお話がありました。親野氏はだらしなさは生まれつきで、子どもも親も悪くないと言われていました。子どもがだらしなさを怒られた時にシュンとした表情をしていても、本質的にその自分のだらしなさに困っているわけではなく、怒られていることに困っている場合が多いということです。でも大人になる過程で自分がそのだらしなさに本当の意味で困ってしまう場面が増えてきて、それは治そうという強烈なモチベーションになる、大人は人の話を聞いたり本を読んだり自分なりの“なおす方法”を選択することも出来るということです。「生まれつき」を怒り続けるよりも、「あなたのことが大好き」「〇〇してくれてありがとう」と子どもに伝えることで、子どもが自分という存在

を大切に感じて、それが生きていく力になるということでした。すぐに出来る方法として「子どもの写真を飾る or 手にとれる場所にアルバムを置く」ということをお勧めされていました。子どもたちが何かを頑張っている時の写真、きょうだいで遊んでいる写真、親との写真を何度も目にすることで「自分はこんなことを頑張れた」「きょうだいとの時間が楽しい」「お父さんお母さんに大切に思われている」という思いが心の深いところに育まれるそうです。

講師の吉田田タカシ氏は現役で活躍されているバンドマンでもあるということで、「みなさーん！楽しんでますか〜？」と講師という印象とはかけ離れた挨拶で登場され、会場もコンサートのような空気に変わり歓声があがりました。吉田田氏は子どもの頃「なんで勉強するん？なんでみんな同じ服を着なあかん？普通って何？ちゃんとって何？って思っていて、頭の中がグワングワンしていた」と話されていました。吉田田氏が運営されているアトリエ eft という子どもたちの学びの場では「学ぶとは正解を暗記することではない、人生の消費者ではなく作り手になる」ということをテーマにされ、その実践を２５年間続けてこられています。今の学校教育システムの中では子どもたちは毎日正解を暗記し、暗記したことをテストするということを繰り返しています。その中で子どもたちの中に「正解信仰」が根付いていて、学校を卒業して大人になった時に「自分で考えよう」「自分で決めよう」と求められても、どうしても多数派に紛れて「間違いにならない」ように振舞ってしまうと指摘されていました。学校で教えてくれるたくさんの知識は無駄ではない、でもそれは何かやりたいことを見つけた時に考える為の素材であり、その素材を暗記することが目的になってしまっているのが今のシステムの問題だともお話されていました。明治 5 年の学制公布以来 150 年間続いてきた子どもを均質化する教育は役割を終えた、そういう教育に未来はないのだと思う、自分のような考えの人間が PTA の大会に呼んでいただけるようになったこともそういう時代のうねりの現れだと感じていると言われていました。親は子どもに対し色々と期待を持ってしまうかもしれないが、“血は繋がっていても、人生は繋がっていない”と伝えたいと話されていました。

講師の西野博之氏は「10 年後には今ある仕事の 49%が AI にとって代わる」という研究データがあると紹介されていました。その社会の中で生きていく為に子どもたちに必要なのは、機械にできない人間としての能力を伸ばすことというようなことを話されていました。西野氏が運営に携わる神奈川県のゆめパークでは「ケガと弁当自分持ち」を合言葉に、子どもたちは火、水、道具、穴掘り、木登りなんでも自由に体験しているということです。親は「クウ、ネル、ダス」（食べる、寝る、排泄）に気を配り、問題を先回りして解決するのではなく、子どもが本当に困ってからしっかりと受け止めて助けてあげる場所になることを大切にされているということでした。

吉田田氏と西野氏はそれぞれ不登校の子どもたちの居場所づくりもされています。不登校児童が過去最多の 30 万人になろうとしている現状について、お二人は「保護者も学校も悪くない、ただ長い間続いてきた教育システムが疲弊し、限界にきたということ。私た

ち大人がそれぞれの勇気を出して変えていくときが来たということ。」というようなことを言われていました。

【最後に】

川崎市は全国で初めて子どもに関する権利条約を作った都市です。西野氏は当時その編集委員のメンバーで、編集委員として川崎市の子どもたちも参加していました。条例が完成を迎えた時、編集に携わった子どもたちが大人に向けてサプライズでメッセージを持ち込んだそうです。西野氏はメッセージを見て、「やられたと思った、子どもたちの為にいい条例を作れたと満足している自分が恥ずかしくなった」と当時を振り返って話されていました。以下がそのメッセージの全文です。

> まず、おとなが幸せでいてください。おとなが幸せじゃないのに子どもだけ幸せになれません。おとなが幸せでないと、子どもに虐待とか体罰とかが起きます。
>
> 条例に「子どもは愛情と理解をもって育まれる」とありますが、まず、家庭や学校、地域の中でおとなが幸せでいてほしいのです。
>
> 子どもはそういう中で、安心して生きることができます。
>
> ＜平成 13 年(2001 年)3 月子どもの権利条例子ども委員会のまとめ＞

参加報告は以上になります。岸和田市 PTA 会員の一人として、素晴らしい講師の方々からお話を聞かせて頂けたことや、全国の方々と交流させていただく貴重な機会を頂けたことに心より感謝いたします。

岸和田市 PTA 協議会
大久保　歩